

追悼 林 真一郎先生

いとうたけひこ Ito Takehiko

林真一郎先生の追悼特集として、絶筆の論文である「自然退縮を望む進行性胃がん患者が自己暗示を併用した効果」と著作・論文等一覧を本号に収めました。この論文は、もともと日本催眠医学心理学会の学術雑誌『催眠学研究』に投稿中のものでしたが、ご親族とも相談の上、投稿を取り下げ、本号に掲載することになりました。

林真一郎先生は1963年11月25日生まれで、上智大学大学院文学研究科心理学専攻博士後期課程を2000年に修了され、博士（心理学）の学位を取得されました。専攻は臨床心理学、カウンセリング心理学でした。日本カウンセリング学会、日本心理学会、日本心理臨床学会、日本催眠医学心理学会、米国心理学会、日本臨床動作学会、日本学生相談学会などに所属されておりました。

和光大学では、2003年4月より当時の人間関係学部の人間発達学科に臨床心理学担当の助教授として着任されました。そして2007年4月の学部学科改組により現代人間学部心理教育学科准教授という肩書きに変わりました。2010年まで授業を担当され、2011年のサバティカルイヤーの途中の5月23日に他界されました。

学部だけでなく大学院でも2004年4月以来、社会文化総合研究科発達・教育臨床論コース助教授を併任されておりました。学部と大学院での主な担当科目は、「臨床心理学演習」、「臨床心理学」、「臨床心理学特論」および「臨床心理学実習」（大学院）でありました。ほかに、心理学の研究法に関する授業（「心理学基礎実験」、「質問紙法」、「面接法」）をご担当になり、また隔年でカウンセリング心理学、心理学の入門授業（「心理学の考え方」、「青年心理学」、「プロゼミ」）を担当されました。心理学をアカデミズムからのみ捉えるのではなく、今起こっている身近な現象との関わりの中で、心理学の用語がどのような意味を持っているのかを考え、具体例をあげながら受講生自身の人生のヒントにまでつながる「生きのよい言葉」になるよう工夫されておりました。その具体例として、2008年度の臨床心理学演習で、林ゼミ生たちはノイマン著「グレート・マザー」をもとに豊かな連想を語り、イメージを自由に広げた課題レポート集を仕上げました。また、セミナーハウスなどを利用して、3泊4日の集中的グループ体験を実施する合宿形式のカウンセリング心理学もユニークな授業でした。

また、大学の委員や役割として、2003年度は学生生活主任、紀要委員、2004年度には学生生活主任、自己点検自己評価実施委員、大学院教務委員、2005年度には入試委員、自己

点検自己評価実施委員、情報センター委員、2006年度には企画室員、2007年度は大学院発達・教育臨床論コース代表、企画室員、2008年度は大学院発達・教育臨床論コース代表、企画室員、情報センター委員、2009年度、2010年度共に学生生活会議委員、ハラスメント委員会相談員を担当され、大学の職務を全うされました。

学外活動では、出身校の上智大学総合人間科学部心理学科、上智大学カウンセリング研究所、横浜市立大学国際文化学部をはじめ、東京農工大学（2008年度）において非常勤講師を務められました。そのほか、日本カウンセリング学会拡大編集委員や医療安全支援センター初任者研修講師も務められておりました。

2008年度版の『和光大学につどう教師たちのプロフィール』では、研究テーマとして、(1) コリン・ウィルソン著「アウトサイダー」を素材としたアウトサイダー尺度の開発、(2) 自己暗示および自己催眠のガン細胞自然退縮への適用、(3) 共感覚における視覚と聴覚の共通属性、(4) トランスパーソナル・アプローチにおける「日本的なるもの」の4つを挙げておられた。スコットランドの Findhorn Foundation のプログラムに参加した体験から触発されたテーマであるトランスパーソナル・アプローチのワークショップでの言語・非言語・無意識のとらえ方やあつかい方に注目し、それらを体感的に記述することを通して、「日本的なるもの」の言語化にご関心を持たれたようです。トランスパーソナル・アプローチと日本文化の結合により、「日本的なるもの」を言語化して、「輸入物でない、日本人の心性に深く染み込むような心理療法を自前で構築」されることを目指しておられました。

また、学内の共同的な研究活動にも貢献されました。2007年度教育充実費事業「ドロップアウト者ゼロをめざして：学生相談からのアプローチ」をテーマに矢田秀昭先生、小林猛久先生とともに共同研究されておりました。これをベースとした学生支援GPへの応募を契機に、学生相談を含めた和光大学の学生支援の包括的なビジョン（ソフトボーダー）を職員の方々と協力して構築されたのでした。その成果の一部を2008年6月、リスボンで開かれた第2回国際コミュニティ心理学会大会において、「Soft border: A framework of university support system for both students and other stakeholders」と題してポスター発表されていたのも、懐かしく思い出されます。この研究は、その後は心理教育学科の教員が中心となった研究プロジェクト『コミュニティ援助の理論的・実践的研究』に位置づけられ、共通のフィールドとしての和光大学の学生をどのようにサポートしていくかという課題となり発展していく予定でした。しかし、林先生の健康上の理由で、プロジェクトの成果の刊行図書である『コミュニティ援助の展望』（角川学芸出版より2012年2月に発行予定）には、先生のお名前は「分担執筆著者プロフィール」ではなく「献辞」と「あとがき」にしか遺すことができませんでした。

林先生の闘病の仕方は、西洋医学の援助は受けるが、基本的には自分の免疫力・体力を保持し、精神の安定を得ることによって切除手術をせずに胃がんと闘うということでした。生物医学モデルの医療であれば、悪いところを無くしていくという発想ですが、林先生は

不良息子でも我が子として親がかわいがるように、悪性腫瘍も自分の体の一部として、自分の体と心の声を聞きながら、生活の質を保っていくという方針だったと思います。西洋医学の主流から見れば批判される方法だったかもしれませんが、本紀要の林論文にもあるように、精神が肉体に及ぼす影響力を最後まで信頼し実践した一貫性のあるみごとな生き方だったと思います。

リスボンの学会の夜に、レストランで同僚たちとワイングラス片手に語り合ったことが懐かしく思い出されます。学生たちに人気があった林先生は、その肉体がなくなっても、いつまでも我々の心のなかに存在し続けると思います。林先生、安らかにお休みください。

(2012年1月17日)

————— [いとう たけひこ・和光大学現代人間学部心理教育学科教授・学科長]